

## 和良村の農村歌舞伎舞台

小林 広美  
安田 徳子

岐阜県は全国でも地芝居の盛んな地区で、現在も地芝居を傳承する地域、あるいは地芝居の遺構である舞台を残す地域が多い。近年、地域文化への関心が高まって、地芝居の継承や復活に力を入れる風潮も起ってきた。しかし、これらは新しい時代の流れを受けて変容していく場合が多く、却って古態を残すことを困難にしている一面もある。特に、遺構としての舞台は、老朽化して維持・保存が困難なこと、時代に合わないことなどから、次々と失われているのが現状である。

昭和四二・四三年度の二年に亘る文部省科学研究費補助金を受けての角田一郎氏らによる総合調査、及びそれ以前、竹内芳太郎・松崎茂両氏が行われた調査によって、全国的な舞台分布の輪郭が判明した。これらの調査・研究は、角田一郎編『農村舞台の総合的研究』（一九七一 桜楓社）・同『農村舞台探訪』（一九九四 和泉書院）・

竹内芳太郎『野の舞台』（一九八一 ドメス出版）・松崎茂『日本農村舞台の研究』（一九六六 同刊行会）、あるいは守屋毅『村芝居』（一九八八 平凡社）・景山正隆『愛すべき小屋』（一九九〇 冬樹社）として発表された。しかし、一〇〇〇棟を遥かに越える舞台が全国に分布しており、それぞれが異なった歴史・風土の中で建造・利用されてきたのであるから、個々の舞台についての詳細な調査・研究が及ばなかった地域も多かった。さらに、それから現代まで、すでに二〇年以上の歳月が流れ、社会の状況も大きく変化している。前記調査後に解体・廃止された舞台も多く、近年再調査の必要も叫ばれている。

岐阜県の舞台については、全国で他に例を見ない劇場型舞台の存在など、注目すべき事例が多いので、前記の研究を踏まえて岐阜県教育委員会が再調査を行い、『岐阜県の農村舞台』（一九七二）とし

て報告も公にされているが、この調査からもすでに二五年が経過しているし、この時も詳細な調査の及んでいなかった舞台もある。こうした状況の中で、平成七年及び八年に岐阜県郡上郡和良村の舞台を調査する機会を得たので、報告しておきたい。

一、和良村の舞台

和良村は、岐阜県のほぼ中央、郡上郡の東端に位置し、西は八幡町、北は明宝村、南は美並村、東は益田郡金山町と境を接している。北は東洞岳・南は黒岳に囲まれ、和良川・鹿倉川・土京川などの河川が流れる山間の静かな村である。村内は、田平・東野・横野・鹿倉・宮代・野尻・宮地・上沢・下沢・法師丸・下洞・安郷野・方須・上土京・下土京の一五集落より成る。各集落には、社名は戸隠（九

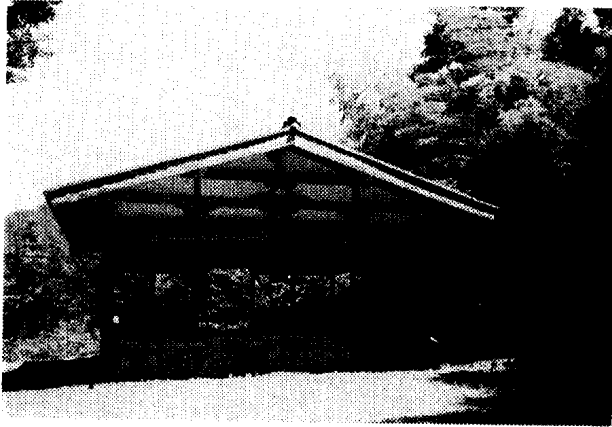
頭竜）・白山・八幡などさまざまであるが、一つずつ神社があり、舞台はこれらの神社に所属する形で存在している。回り舞台や花道の取付跡などが残っているので、これら舞台は歌舞伎用舞台であるが、『和良村史』（昭和六三、一一二）によれば、「戦前まではほとんどの神社では、祭礼の神楽終了後「ニワカ」と呼ばれる素人芝居、ニワカ芝居が行われていた」ということであり、この舞台では地芝居が上演されたものと考えられる。

現存する和良村の舞台は一三、下沢の日吉神社・安郷野の稻荷神社には現存しない。この状態は、『岐阜県の農村舞台』に報告されている状況と同様である。これらは、全て舞台のみの半小屋式で、切妻入りの同形式のものである。客席は舞台前の空地を利用してゐる。まず、これらについて、表にして示すと次の如くである。

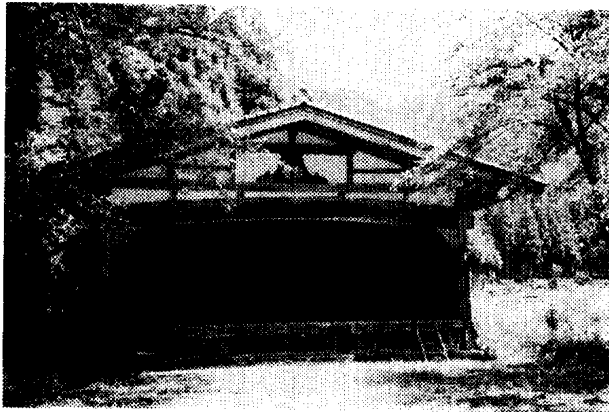
△和良村の舞台一覧▽

No.	集落	所在地	建築年代	存否	間口(m)	奥行(m)	床上(m)	床下(m)	備考
①	田平	白山神社境内、正面		○	8・45	8・45	2・26	0・98	回り舞台なし、二重台1台
②	東野	白山神社山麓、右手		○	8・88	9・29	2・28	0・92	回り舞台なし、二重台大小8台
③	横野	大久古神社境内、右手		○	8・70	7・65	2・27	0・83	回り舞台なし
④	野尻	八幡神社境内、正面	明治21、8	○	9・44	9・40	2・43	後1・84 前1・10	回り舞台
⑤	宮代	白山神社境内、正面	明治19、3カ	○	10・26	9・32	2・49	後1・81 前1・19	回り舞台。昭和42・6修繕





① 田平の舞台



② 東野の舞台

下は背面・側面とも板壁だが、背面には大きな明り取りの窓、下手横に引戸。正面下手には花道の取付跡があり、用材らしきものが床下に残っている。他に特別な舞台機構はない。破損しているが二重台が大小八台残っている。全面に舞台へ上がるための梯子が一台おかれている。舞台の後三分の一位の部分に柱が二本ある。また、上手側には小川が流れているので、楽屋は舞台の柱から後部分と裏手・下手横を利用したのである。電気の配線があり、舞台の内外に電球が付けられているが、近年使用された形跡がない。

③横野 大久古神社境内。石段の上に立つ本殿の向かって右手に立つ。客席は前面の空地。瓦葺き切妻入りで、舞台前面は木戸が詰められている。梁上部は白壁、背面・側面の下の壁はトタンで補強されており、雨樋もしっかりしたものがついており、電気の配線もあり、比較的新しい時期に修繕を加えた跡が窺える。正面下手には花道の取付跡がある他は、他に特別な舞台機構はない。下手横に引戸。楽屋は舞台奥部分あるいは裏手・下手横を利用したのである。現在は地芝居は行われていない。

④野尻 八幡神社境内。本殿の正面に向い合って立つが、舞台の前は道路が横切っており、舞台は水田の中に立つ形になっている。口碑によれば、明治二年八月の建造。客席は社殿前の空地。瓦葺き切妻入りで、舞台前面に木戸が詰められるようになっていたが、左側半分しか詰められておらず、現在、舞台は材木などの物置となっている。背面・側面とも上部は白壁、その下には腰板が張られている。背面には遠見の窓が切られているが、近年内装・外装に大幅な修理が加えられ、遠見の窓もサッシが詰められている。元は回り舞台を備えていたが、修理の折、盆を無視して床板を張り替えたので、現在は使用できない状態となっている。道路から水田面への斜面に立つので、舞台下は一米程掘り下げられ、コ字型に石垣が組まれている。下手横に戸、背面には奈落への降

り口がある。正面下手には花道の取付跡。回り舞台は皿廻し式で、盆の大きさは直径五、八米。盆の裏に渡してある横木の溝に棒を垂直に指し込んで廻す。心棒の先端には金具が打ちつけてあり、廻り易い工夫がなされている。但し、現在は奈落には竹や木材が対角線状に積み上げられ、長く使用されていない。楽屋にはこの奈落が使用されたのであろう。猶、舞台背面、窓上の板に次の落書きがある。

昭和二十四年 四月六日

七日

素人歌舞伎

千代萩 桔梗旗上

壺坂靈験記

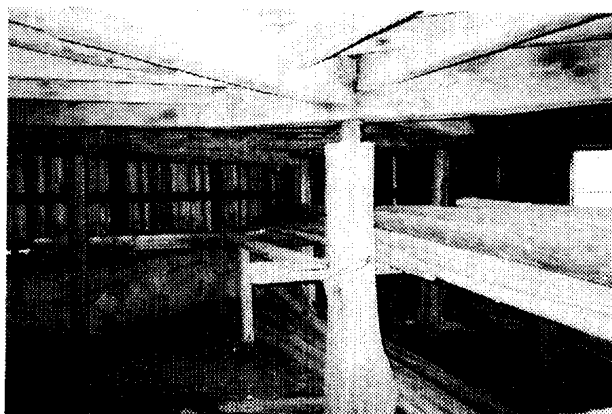
日向島

これにより昭和二四年までの舞台の使用は確認できるが、『和良村史』によると、野尻地区の祭礼は九月七日となっているので、この落書きの芝居は祭礼の折の奉納芝居ではなかったようだ。

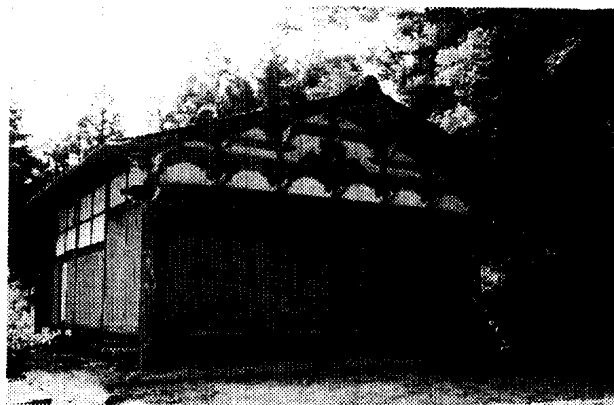
⑤宮代 白山神社境内。本殿は山の中腹にあるが、その裾野空地に、本殿と向い合って立つ。客席には前の空地。トタン葺き切妻妻入りで、舞台前面に戸はない。虹梁の上は白壁、背面・側面はトタンで補強されている。舞台奥の書付によると、昭和四二年六月に

修繕が加えられたことが知られる。皿廻し式の回り舞台を備えている。盆の大きさは直径六米。僅かの斜面を利用して、奈落が設けられ、ここで、④と同形式で盆を廻すようになっていた。但し、現在は奈落には木材が雑然と置かれ、長く使用されていない。下手横に出入口があり、階段が付いている。楽屋には舞台奥・下手空地が使用されたのであろう。正面下手には花道の取付跡。現在、歌舞伎は行われていない。この神社は養老五（七二一）年の創建と伝えられる和良村最古の白山神社（『和良村の文化財第一集』）で、九月二十日祭礼には大神楽と伊勢神楽・からくり山車（猩々）・馬追い行事などが行われるが、舞台は使用しない。

⑥鹿倉 白山神社境内。本殿の向って左手に立つ。客席には本殿前の空地。トタン葺き切妻妻入りで、舞台前面は、中央に柱が一本填められ、さらに虹梁から数一〇糎下がった部分に横木が渡され、その下にトタンの戸が填められている。背面・側面は白壁、その下の板張部分はトタンで補強されている。屋根の両端には樋が付けられている。下手横に出入用の戸がある。舞台背面に巾二米程の部屋がある。裏手に大きな明り取りの窓と出入口があり、楽屋に使用したものであろう。正面下手には花道の取付跡、上手に舞台上がる梯子。他に舞台機構はない。



④ 野尻の舞台床下 廻り舞台の遺構



⑥ 鹿倉の舞台

⑦宮地 戸隠神社境内。石組の上の本殿の向かって左手に立つ。トタン葺き切妻妻入りで、正面には板戸が詰められている。虹梁の上は白壁、側面・背面は板壁。下手横に出入口がある。背後には巾二、五程の部屋があり、明り取りの窓がある。舞台背後及びここが楽屋に使用されたのであろう。正面下手には花道の取付跡。回り舞台を備えていたが、床下は一米程で奈落は設けられていない。土地の人の説明によると、回り舞台は盆の上に直径二榎程の輪の形をしたものが付いており、その輪に縄を結び付けて引いて廻していたのだという。床下の芯棒の上に盆があり、回転がスムー

ズになるよう工夫されている。舞台上部に張られた二枚の板書によると、昭和四八年と平成七年の二回の改修が知られるが、昭和四八年の改修の際、盆の上から新たに床板を張ったため、床下に回り舞台の遺構が見られるのみ。それも、現在は盆と芯棒が切り離されており、原型は見られない。舞台自体は現在も使用されており、舞台内部・全面には電気が配線されている。

ところで、この戸隠神社境内には、⑦と向い合って、⑧の上沢の舞台が本殿右手に立っている。この二つの舞台は表に示した如く、大きさに僅かの違いはあるが、両者形態は酷似しており、それぞれの舞台を宮地・上沢両地区で管理している。戸隠神社は和良村最大の神社で、元は九頭大明神と称し、和良五保内の惣社だった。祭礼には宮地・上沢の他、法師丸・下沢地区も参加していたが、現在は宮地・上沢両地区だけとなり、このような珍しい形態となっている。現在の祭礼は九月一五日・一六日。祭礼には、両地区から大神楽・伊勢神楽・ヒゴ馬・山車からくりが出され、境内の空地で披露される。ちなみに、からくりは村の無形文化財で、上沢地区がチャントコの舞と那須与一の弓取り、宮地がオカメの舞と人形の鉄棒渡りである。これらの芸能が終了した後、舞台を利用した芝居が行われる。現在は、両地区が一年交代で勤め、舞台もそれぞれの管理するものが使用されている。客席は両舞台前

の空地。両舞台は神楽殿と呼ばれており、『和良村史』に引用される「社寺明細帳」によると、「創立未詳、慶長十二年並ニ明治拾八年建替、縦五間三尺、横五間、縦五間、横四間三尺」と記されている。前者が宮地、後者が⑧の上沢の舞台で、現存の舞台は明治一八（一八八五）年の建替の時のもの、そして、これ以前にもここには神楽殿があったことがわかる。確認はしていないが、『郡上の祭り』によると、⑦の舞台の腰板に、

明治二十一年の八月十六日ヨリ三日間日出度はし免

寒紅梅六幕

御所桜堀川夜討・弁慶上使乃場

小家・八幡住人平野長十郎

という落書があった由。したがって、この舞台では、明治二年の祭礼に「ニワカ」と呼ばれる素人歌舞伎が行われていたことが知られる。おそらく、この時から新しい神楽殿が使用されたのであって、素人歌舞伎はそれ以前から行われていたであろう。また、土地の人の話によると、宮地と上沢は互いに張合っていたため、神楽も「ニワカ」も互いに負けじと、古くは同時に行っていたという。しかし、戦後になると「ニワカ」は次第に廃れて、他所の者や旅回りの一座を呼んで行う「ウケ芝居」が多くなり、何時からかは明瞭ではないが、舞台も一年交代で使用するようになった。

昭和五一年明正会（和良村の老人会）による「ニワカ歌舞伎」が上演されたが、現在でも「ウケ芝居」が主流である。⑦の舞台背面には次の落書きがある。

舞踊ショー

- 一、あばれ太鼓 中条 一夫
- 二、夕すげの乞い 西崎 幸茂
- 三、命くれぬい 若草 春美
- 四、□□佐渡情話 市川 福升 あすか
- 五、緋牡丹お竜 西崎 幸茂
- 六、男吉良常 若草 春美
- 七、大利根月夜 市川 福升 あすか

昭和五十九年九月十五日 吉日

昭和六十一年九月十五日 吉日

人情時代劇 大利根月夜

和良村青年団

これによれば、近年は村の青年団や有志による演劇・舞踊なども行われていたようだ。舞台道具としては、二重台一台・松の描かれた襖六枚・幕（宮地青年団）が伝わっている。

⑧上沢 戸隠神社境内。石組の上の本殿の向かって右手に立つ。瓦葺き切妻入りで、正面には板戸が填められている。前述した如

く、神楽殿と呼ばれており、明治一八年の建造で、向い合っている⑦の舞台より、僅かに小規模だが、形態は酷似している。上廻しの回り舞台と花道の取付跡も同じ。⑦同様に、芯棒も取り外されており、使用は不可能。上手横に出入口、上半分ガラスの入った木製の戸が詰められている。上手上部に張り出すように太夫座が取付けられている。太夫座の壁に次のような落書きがある。

昭和卅一年九月十五日

竹本栄寿太夫

これにより、昭和三二年の祭礼には⑧の舞台で歌舞伎が行われたことが知られるが、この舞台も⑦と同様の経過を持っていると考えられるので、明治二一年以前から歌舞伎が行われており、明治二一年からこの新築の舞台が使用されたであろう。この両舞台で何時何が上演されたかはほとんどわからないが、平成七年の祭礼は上沢が当番で、この舞台で「ウケ芝居」が行われた。調査に訪れた時には、その準備が進められており、組み立て式の花道も取り付けられていた。花道は長方形の箱型をなしており、舞台に対して一〇〇度から一二〇度位に斜に取り付けられて、舞台と花道の繋ぎ目は三角形の板を一枚繋いでいる。この舞台も⑦同様になり改修が加えられているが、⑦よりは元の状態が残っているようである。舞台背後及び裏手が楽屋に使用されているようだ。正

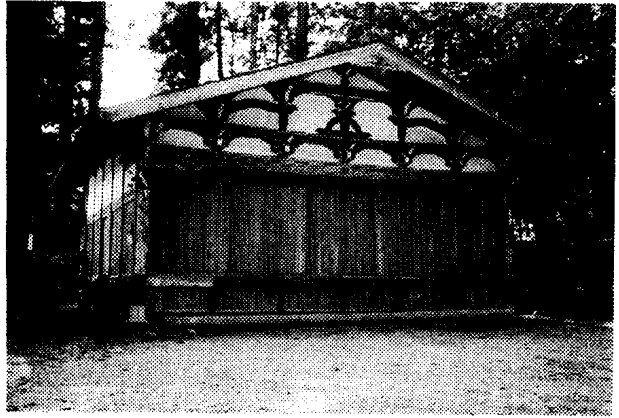
面の空地には雨天でも使用できるように、二つの舞台の間にビニールシートが掛け渡されていた。

⑨法師丸 白山神社境内。本殿は石垣の上であり、その前の空地の右手に立つ。客席は社殿前の空地。瓦葺き切妻妻入りで、舞台前面に戸はない。虹梁の上は白壁、背面・側面は板壁。両横に出入口。下手に一米弱の通路が付いている。上手・下手両方に花道の取付跡があり、両花道が使用されたい。皿廻し式の回り舞台を備えている。盆の大きさは直径五、五米。床下は一、八五米程掘られ、石垣で囲んで奈落となっており、ここで回り舞台は廻しづらいが、すでに心棒が、盆から数十糎の所で切り取られており、縦横に柱が渡されて固定されているので、回り舞台は使用不可能である。奈落の出入りは後からしたらしい。楽屋には舞台奥とこの床下が当てられたのであろう。舞台内側にはトタンが張られており、床にはアニメキャラクターの神輿や木材などが置かれ、現在は物置となっていることが窺われる。二重台二台が残っている。

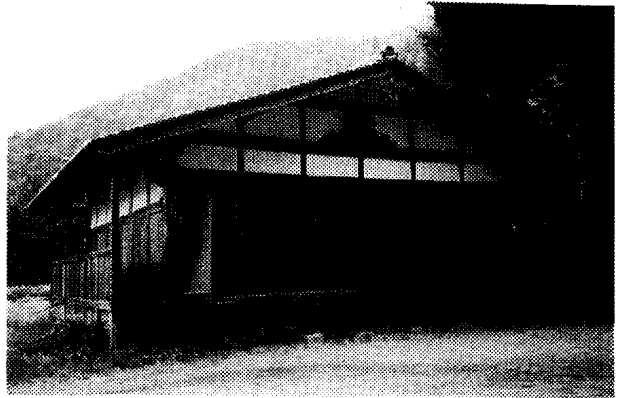
⑩下沢 日吉神社境内 廃絶

『和良村史』によると、日吉神社は、元は寺平一一四五番地であり、ここには舞台もあったが、和良中学校体育館建設のために寺平一一二九の三の現在地へ遷宮した時、本殿のみが移転となり、舞台は取り壊された。





⑦ 宮地の舞台



⑪ 下洞の舞台

⑩ 下洞 白山神社境内。本殿に空地を挟んで正面して立つ。客席は本殿との空地。瓦葺き切妻妻入りで、舞台前面に木戸が詰められている。四方とも梁の上は白壁、背面・側面は板壁。両横に五〇糎ほどの板で仕切られた通路。下手にはさらに外側に腰板のみで一メートル程の通路が付いている。下手に花道の取付跡があり、下手通路は正面が開いているので、花道の通路に使用したもののか。回り舞台を備えているが、表に示した如く、床下は一メートル弱しかなく、奈落はない。芯棒も切り取られ、床下には何本も柱が建てられ、盆は固定されて、使用不可能になっており、回し方は確認できない

かったが、おそらく、⑦⑧と同様の上回しであったと想像される。

⑫ 上土京 熊野神社境内。本殿に空地を挟んで正面して立つ。客席は本殿との空地。瓦葺き切妻妻入りで、梁の上部は白壁、虹梁の下は開け放たれたままである。背面・側面とも壁などはなく、腰板があり、その上部は斜に木が打ち付けられているだけで、四方吹き抜けとなっている。舞台の背面は神社入口の鳥居と直面しており、腰板部分が格子となっており、その内側に賽銭箱も置かれており、現在は拝殿として使用されている。舞台中央奥に、柱を建てて何かに利用された二重台一台置かれていたが、現在は舞台としては使用されていない。特別な舞台機構は何もないが、床下は一メートルほど掘り下げられて、石組が施されており、古くは回り舞台を備えた舞台だったそうである。しかし、現在は全面的に改修が加えられ、痕跡はない。床下の出入りは下手横。物置に使われている。

⑬ 下土京 熊野神社境内。本殿の石垣下の空地を挟んで正面して立つ。客席は本殿との空地。瓦葺き切妻妻入りで、梁の上部は白壁、虹梁の下は開け放たれたままである。背面・側面とも壁などはなく、腰板があり、その上部は斜に木が打ち付けられているだけで、四方吹き抜けとなっている。山の上であり、舞台の背面は長い階段を上った境内入口の鳥居と直面しており、腰板部分が格子となっており、その内側に賽銭箱も置かれており、拝殿としても使

用されている。前面下手には花道の取付跡があり、電気の配線がなされている。下手横に出入口がある。上手の壁に落書きがあるが、判読できない。

#### ⑭安郷野 稲荷神社境内 廃絶。

現在は、本殿前の空地に舞台跡かと思われるブロックの囲いが数段あるだけである。

⑮方須 白山神社境内。本殿に向かって右手に立つ。客席は本殿前の空地。瓦葺き入母屋妻入りの村内で最大規模の舞台だが、平成七年四月に全面改築が施され、改築前の面影は全く残っていない。現在は、舞台前面にサッシの戸が詰められ、舞台両側に通路がある。床下は一米弱で、奈落はなく、特別な舞台機構もない。内部は公民館として使われ、祭礼時にはカラオケ大会などに使用されている由。

### 二、和良村の舞台の特徴

和良村は、明治二七年、和良川流域の平安時代から和良郷と呼ばれた地域の一六箇村が合併して成立した。この一六箇村とは、旧遠藤領の方須村・法師丸村・宮地村、和良遠藤領の下洞村・下沢村・宮代村、旧天領の鹿倉村・野尻村・東野村・田平村・厚波村・横井村・下野村・上沢村・土京村・安郷野新田である。これらの内、横

井村、厚波村は『和良村史』に引く「村明細帳」などによると、僅か数軒の非常に小規模な村で、古くからそれぞれ下野村・田平村と関わりが深かった。特に下野村と横井村は明治一四年以前に合併し、横野村となっていたようだ。また、土京川にそって、規模も大きく広範囲に広がった土京村は、氏神も別であり、集落が上・下二地区に分離していた。したがって、現在の村内一五区はそのまま明治初年頃、あるいはそれ以前の生活共同体をほぼ表していると見てよい。これらの各地区には、江戸初年頃までには概ね一社が氏神として祀られた。和良村の舞台は、前項に示した如く、この神社にそれぞれ造られたものである。中には一地区に二社を祀る地域もあるが、ここでは大きい神社の方にだけ舞台が造られ、一地区に一舞台となっている。

さて、和良村の舞台は、現存は一三個であるが、いずれも切妻入りで、間口・奥行が近似した正方形に近い形態のものである。大きさは、間口・奥行七米位の上土京のものを除けば、多少の大小はあるが、概ね九米前後と似通っている。側面・背面の三方を板壁（現在はトタンを張ったものもある）で覆ったもの、三方とも腰板のみで、四方吹きさらしものがあるが、いずれも梁より上部分は白壁で塗られたものが殆どである。前面には虹梁、下手に花道の取付跡を持つ（改装著しい上土京・方須及び田平を除く。法師丸は両花

道跡を持つ)。また、野尻・宮代・宮地・上沢・法師丸・下洞・改装前の上土京の舞台は回り舞台を持つ。和良村では、戸隠神社境内の宮地・上沢の舞台が「神楽殿」と呼ばれている他は、「舞台」と呼ばれているが、木曾川及び飛騨川流域に分布する岐阜拝殿系と通称される農村歌舞伎舞台の基本的な形態と一致している。『和良村史』に引く「社寺明細帳」には各神社の舞台については記されておらず、拝殿が記されているが、この拝殿の大きさが現存の舞台に近似している場合が多く、これが舞台を表しているのではないかと思われるので、和良村の舞台も全て岐阜拝殿系の典型と見てよからう。さらに、これらの舞台は、前面の虹梁の上部、白壁の中に装飾性の高い柱が縦横に二・三本渡されている。中央部分には、雲形などの彫刻を施した板が填められ、ここに各神社の紋や、白山神社を示す「白」字などが書かれている。背面の上部も同様に造られている場合が多い。また、虹梁及び前面の柱には唐草模様の彫刻が施されている。これには彩色が施されたものもあるが、現在はほとんど色が褪せてしまっている。前面に戸を填めてあるものと開け放たれたままのものがあるが、戸を外せば全て同形、舞台には太夫座（上沢の舞台のみ太夫座を持つ）や固定二重などの機構はない。

このように、和良村の舞台は全て大きさも形態も極めて近似しており、極近い時期に同じ大工もしくは同じ流れを汲む大工によって

造られたものではないかと思われる。建造年次がわかるものは少ないが、戸隠神社の宮地・上沢の両舞台は明治一八年、舞台初めは明治一二年八月。野尻の舞台も明治一二年八月の建造と伝えられている。法師丸は明治一七年以前の建造。宮代の舞台が「社寺明細帳」にいう拝殿ならば、この記載から明治一九年三月の建造と考えられる。これらから類推すれば、和良村の舞台は明治一〇年代の後半から二〇年代前半にかけて次々と建てられたものと見ることも可能であろう。和良村の各地区は相互に張合い影響し合っていて、一地区が舞台を造れば、他の地区も造るということがあったのではなからうか。

形態に注目して、和良村内の舞台を見ると、まず、舞台の位置から次の如くに分けることができる。

I 鳥居・舞台・本殿が一直線に並び、舞台が本殿と正面しているもの：上土京・下土京

本殿 ↓ 空地 ↑ 舞台 — 鳥居 — 階段

II 舞台が本殿と正面しているもの：田平・野尻・宮代・下洞 鳥居

— 本殿 ↓ 空地 ↑ 舞台

III 舞台が本殿と同じ方向を向いているもの（舞台は鳥居外の山

麓にある) …東野

舞台 ↓空地

本殿 ↓階段 ↓鳥居

IV 舞台が本殿の右手または左手にあって、本殿と直角の方向を向いているもの…横野・鹿倉・宮地・上沢・法師丸・方須

(舞台)



本殿 ↓空地 ↓鳥居



(舞台)

(矢印は建物の向きを示す)

これらからすると、Iは拝殿としての本来の機能も残しているが、他の舞台は地芝居上演のためのものであったと考えられ、先学が指摘される如く、かなり娯楽性を重視した舞台だったと言える。しかし、これらの舞台の位置は地芝居と神事の結び付きの浅深というより立地条件に拠るもので、特に、IやIIIはこれ以外に舞台を建てる場がなかったためと思われる。

また、細部の類似について見ると、田平・東野・横野の舞台は虹梁が湾曲している。また、野尻・宮代・鹿倉の舞台は虹梁及びその上部の装飾が非常によく似ている。さらに、法師丸・下洞の舞台は下手に通路が付けられているなど、上土京と下土京、田平・東野・

横野、野尻・宮代・鹿倉、宮地・上沢、法師丸・下洞というように、隣り合った地区の舞台は特によく似たものであることがわかる。

舞台機構から見ると、回り舞台の有無で二分できる。和良村の舞台では約半数の七箇所(改装前の上土京を含む)が回り舞台を持つ。『和良村史』に掲載された「旧村、地区の戸数・人口」によって地区の人口を見ると、明治二〇(一八八七)年三〇〇人以上の人口を有した地区では、回り舞台を持つことがわかる。これは規模の大きい、財源の多い地区が、回り舞台を造ったことを示しているよう。ところで、和良村の中心部は現在は和良街道と呼ばれる県道八幡・金山線が通っているが、これは明治三十一年に改良工事が始まり、四年後の明治三五年に県道に指定された道路である。これ以前は八幡街道と呼ばれた道が主要道路として利用されていた。念興寺山門前(現在も陸橋下に幅約一米足らずの古道が一部残っている)から上沢の上段の道を通り、九頭の宮前を抜け、野尻の宇山峠(江戸時代に建てられたであろう道標がある)を越えて八幡町の風穴・貢間・美山へと通じる道がそれであった。明治三五年にそれまで沢地内伽藍にあった小学校を現地に移転新築した際に校庭に含まれてしまい、現在の道路に替ってしまったが、郡上郡の中心地は郡上八幡であったから、この八幡街道は和良郷にとって欠くことのできない道であった。回り舞台を持つ舞台は上土京を除いて、全てこの八幡街道沿い

に建っている。和良郷の中ではやはりこの街道沿いの村が勢力もあり、文化に対する反応も早かったということであろうか。

和良村のこの回り舞台には、様式が二種あり、戸隠神社内の宮地・上沢の二舞台（おそらく下洞も同じ）は珍しい上回しである。勿論地形の問題もあるが、近隣に現在のところ同様の舞台を見つけていないので、この上回しの技術が何処から入ってきたのか明らかではない。今後の調査を期したい。

### 三、和良村の歌舞伎

和良村の神社では、祭りに大神楽あるいは伊勢神楽を奉納する所が多い。しかし、これは舞台の上ではなく、本殿前の空地で行われており、舞台では歌舞伎のみが上演されたようだ。和良村の歌舞伎は、高村氏によると、天保一一（一八四〇）年成立の『郷中盛衰記』に、郡上藩主が明和年間（一七六四〜七一）に江戸歌舞伎を招致、これを機会に寛政年間（一七八九〜一八〇〇）に村芝居が始まったと記されているという。<sup>3</sup> 和良村は、前述した如く、旗本遠藤氏領と天領であったために民衆の統制が比較的緩やかであった。そのため江戸時代中期以降はさまざまな芸能者が、八幡街道を通って入ってきた。特に一八世紀以降は大神楽や伊勢神楽を伝えた伊勢御師や願人坊主・勧進巫女などの宗教者、越前瞽女・万歳などの大道芸能者

などが往来した（『和良村の文化財 第一集』所引の『郷中盛衰記』）。こうした状況を背景に、郡上八幡で見た歌舞伎も早速和良各村に入ってきたのである。しかし、具体的な地芝居の記録は、前述した宮地の舞台腰板の明治二年八月一六日の落書がもっとも古いもので、これ以前の具体的な状況はわからない。

『和良村史』によれば、戦前まではほとんどの神社で神楽終了後、地区の若い者や「覚え」のある者によって「ニワカ」と呼ばれる素人芝居（「ニワカ芝居」）が行われていたという。戦後は、昭和三〇年頃までは続いた所（上沢の舞台には三一年の落書がある）もあったが、ほとんどは「ウケ芝居」と呼ばれる買芝居となり、これも現在は戸隠神社の両舞台のみになっている。平成七年も健康センターから芸能団を招いて上演した。また、上演内容も歌舞伎ではなく、「剣劇」や「ヤクザ芝居」であることも多くなった。

上演の記録も多くはないが、口碑や落書によると、「太功記十段目」や「忠臣蔵」など、他地域の地芝居で人気の演目がここでも中心であった。前述の宮地の落書にあった「小家 八幡住人平野十郎」などのように、この地域ならではのものもあったようだ。近隣の郡上郡の村々あるいは益田郡の村々などの記録や舞台の状況<sup>4</sup>から見て、和良の地芝居の最盛期も明治三〇年頃までであったと思われる。したがって、和良村の舞台は村芝居がもっとも盛んであった時期に、

各地区を挙げて造られたものということになる。

江戸時代後期から明治にかけて、和良村各地区では祭りには神楽と歌舞伎が行われ、これが村人の最大の娯楽だった。同じ氏が演じる芝居を家族や親戚が寄って座り、重箱に詰めた御馳走を食べながら見物した。他の地区の人々も相互に見物に出かけた合った。僅か数一〇軒の集落に一個の舞台を造るのはその費用も大変だったろう。舞台にかけて期待の大きさが窺われる。また、各地区で一年に一度の芝居が上演されたとして、この和良では一年一五回も芝居が上演されたことになる。いかに芝居を楽しみにしていたかが偲ばれる。しかし、現在では流通の変化、娯楽の多様化によって、歌舞伎(ニワカ芝居)は廃絶し、舞台の機能も消失した。放置されたり、物置の扱いを受けているものも少なくない。神楽は残っているのに、歌舞伎が廃絶したのは、歌舞伎が神楽より神事性が希薄で娯楽性が高かったこと、神楽より費用がかかることなどが理由として挙げられよう。

平成七年四月に舞台を改装した方須の区長さんによると、舞台に対する住民の考えは年齢によってかなり違うという。年配者は「昔からあるものだから残したい」と考えているが、若い人は「あっても使わないものにお金をかけるのはもったいない。作るなら公民館を」と考えている。文化財という意味でも舞台は残したいが、若い

人の考えも無視できず、結局、方須地区では、舞台を全面改修して、内部は公民館に改装したという。こういったことはこの地区のみでなく、和良村の全ての地区が抱えている問題だ。「ウケ芝居」で一応舞台を使用している戸隠神社の二地区も例外ではない。しかし、舞台は地芝居の実態ばかりでなく、過去の村人の生活、建築の技術など、さまざまな和良村の歴史や文化を伝えてくれる貴重な存在だ。できるだけ元のままに残してほしいものだと思う。

注一、高村正一「地方神社拜殿の機能について」(『名古屋大学文学部研究論集哲学15』一九六七)注三三に引く名生昭雄「農村歌舞伎舞台の系列について」(発表要旨一九六五・六)・守屋毅『村芝居』一六九頁。

注二、松崎茂『日本農村舞台の研究』二五頁・高村正一前掲論文・守屋毅『村芝居』一六七頁。

注三、高村正一前掲論文。

注四、『郡上郡史』・『農村舞台の総合的研究』一七四頁他。『愛すべき小屋』Ⅱ・Ⅲ・Ⅴの各章。

付記 本稿は、小林広美の平成七年度卒業研究の調査・報告を元に、安田徳子が加筆したものである。